

日銀支店長が語る

経済よもやま話



第11回 東北の金の歴史に思う通貨価値の安定

日本銀行仙台支店長 岡山 和裕

東北地方の金の歴史

東北地方と言えば、金を思いつく人も多いだろう。自分が子供の頃に歴史の時間に習った「中尊寺金色堂」は写真といい、奥州藤原氏3代の歴史といい、かなり興味をそそられた。

その中尊寺金色堂を初めて訪れたのは約30年前。森の中の坂道を上ると荘厳な雰囲気が漂っており、間近でみるとその荘厳さがさらに増していた。

それから30年経って、再び訪れてみた。やはり30年が経過していることもあり、色々と感じを忘れていたこともあったが、今回も荘厳さやきらびやかさを痛感した。

30年前は中尊寺金色堂を訪れただけだったが、今回は東北地方に居住している。そうすると、東北地方の金にまつわる場所を訪れなくなった。

そして、訪れたのは、岩手県平泉町の「毛越寺」、宮城県涌谷町の「黄金山神社」、石巻市の「金華山黄金山神社」、気仙沼市の「大谷鉾山」と「鹿折金山」。

毛越寺はまずは何と言っても庭園が印象的であり、「浄土庭園」と言われているらしい。その庭園の周囲にはかつて中尊寺を凌ぐお堂や塔が建っていたらしい。

次は涌谷町と石巻市の黄金山神社。涌谷町の黄金山神社の近くでは金が産出されて、それが朝廷に献上されて、奈良東大寺の大仏の金箔として使われていたのだ。それまでは輸入に頼っていたので、その時の天皇は改元までしたとのこと。また、石巻市の金華山黄金山神社は、牡鹿半島の先であり、船で行く必要があるのだが、3年連続で参拝すると、金銭面で困らないという言い伝えがある。

そして、気仙沼市の大谷鉾山と鹿折金山。大谷鉾山は、1935年の最盛期には年間に約1トンもの金が産出されていて、一大鉾山町が形成されていたとのこと。また、鹿折金山は、1904年に日本最

大の自然金“モンスターゴールド”が産出され、同年開催の米国セントルイス万国博覧会に出品されていたのだ。

では、なぜ東北地方で金が産出されたのか。それは、どうも北上山地が古い地層だかららしい。“そっかあ、地層が経済にも影響するんだ！”

「砂金採り」はいかがですか？

ところで、このような巡りの過程で、数カ所で「砂金採り」体験ができる場所を見つけた。やってみるかどうか迷ったが、まずはやってみようと思ってやってみた。

「金は砂よりも比重が重いので、水の中で砂金の入った砂を入れたトレイを振ると、金が沈む」という理屈は分かっているのだが、やってみるとこれが案外難しい。ガイドの方によると、今は砂金が取れないので、砂金を混ぜているとのことだが、なかなか取れない。制限時間ギリギリに何とか、2つの砂金を取ることに成功した時には、子供のよう嬉しかった。

こうした経験を踏まえての感想。それは貨幣の歴史。歴史の中で、貝や石などがまずは貨幣として使用され、その後、貴金属の貨幣に置き換わり、そして金本位制度から管理通貨制度に変わった歴史。通貨価値の安定の重要性を痛感した。

皆さん、「砂金採り体験」をしてみたいはいかがですか？

岡山 和裕氏 プロフィール

1969年（昭和44年）生まれ
兵庫県出身。本店15部署のうち8部署を経験したオールラウンダー。東日本大震災では、金融機構局で被災金融機関との連携役を担ったほか、熊本地震では決済機構局業務継続企画課長として現場を指揮。前橋支店長、業務局参事役等を経て、仙台支店長に就任